

## 今月の窓

帰れ、「農業は生命産業」へ

牛乳食中毒事件，虚偽表示，BSE，中国野菜残留農薬問題，さらには鳥インフルエンザと，よくぞこれほどまでに，と思うほどに，食品に関連する事件等が相次いでいる。これらにとどまらず，イラク戦争をはじめ各種事件や諸々の社会現象等をも考え合わせると，農業はもちろん，世の中全体，どこかおかしい，本質的なところで何かが狂っている，との感を拭い得ない。

ズバリ言えば，あらゆる分野が利益至上主義，成長信仰や大量生産・大量消費に席捲されて，目先の効率，結果を重視するあまり，本来の意味なり，存在意義が見失われている。建前ばかりが先行する形式主義が，最も大事にすべき“生命（いのち）”までをも喪失させてしまった反動が，こうしたやっかいな事件，現象を生み出している，と考える。

農業もしかりである。例えば，今，安全・安心，そしてトレーサビリティが大はやりである。トレーサビリティは牛肉にとどまらず，農産物全体に広がりつつある。トレーサビリティは履歴を明らかにするものではあるが，直接的に安全性を証明するものではない。安全・安心が確保されてこそトレーサビリティは生きてくるものであるが，これを“葵の印籠”の如く見なすトレーサビリティ信奉者も多い。

肝心の安全・安心への取組みも，我が国での環境保全型農業への取組みは残念ながら遅れている。また，JAS法改正によって検査認証制度が導入された有機農産物についても認定農家の数はあまり増加していない。さらには，その土は貧しく，生産力も低く，持続性を喪失した有機農業が少なからずある，とも言われている。農薬や化学合成肥料を使わなければ有機農業，とマニュアル的にしか受け止めていないのである。

以上は表層的な一例にすぎないが，より根本的に水田や畑の生態系が貧困化し，家畜の健康度が低下していると言われるようになって久しい。生命産業である農業において，農業の近代化が“生命原理”の働きを阻害してきたともいえる。本当の安全・安心は土や家畜や食物連鎖につながるすべてのものが健康であってはじめてもたらされるものである。たい肥の投入等による土作りが基本であり，団粒構造をもった土であればこそ，ほどよい水分と空気を保ち，微生物や小動物が活発に活動してはじめて，農薬や化学合成肥料を抑制することも可能になる。家畜も，牛の場合，そもそもが草食動物であり，粗飼料中心に給与し，かつ放牧により十分に運動させることによって，疾患を減少させ，抗生物質等の投入を減少させることができる。“生命”を大切に育み，これを消費者に届けていくこそ農業者の基本的役割である。一見すると遠回りには見えても，「農業は生命産業である」という原点に立ち返り，持続的循環型の農業を前提に，効率化にも努めていくことが，豊富な生態系をもたらし，多面的機能が発揮され，安全・安心にも直結する近道であり，国内農業に対する消費者の理解・支持を獲得していく本来の道でもあるのである。

((株)農林中金総合研究所常務取締役 蔦谷栄一・つたやえいいち)